
黒犬異世界奇譚

黒い悪魔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒犬異世界奇譚

【Nコード】

N9362Y

【作者名】

黒い悪魔

【あらすじ】

平凡な会社員、西崎真也はトラックに突き飛ばされてご臨終。が、気づいたら黒毛のワンちゃんに転生！？しかも転生先は異世界だった。犬に転生しちゃった主人公と、そのうち加わる愉快的な仲間の物語。異世界モノを読みあさっているうちに無性に書きたくなったので投稿。そのうち主人公がチートになるかもしれないので苦手な方はご注意を……。

プロローグ

俺の名前は西崎眞也。冴えない21歳会社員だった。特技はどこでも寝られること。環境適応力が高いと自分では思っている。ちなみに恋人はいない。趣味は読書でラノベから推理小説まで手広く読んでいて、音楽もそこそこ好きな、それこそどこにでもいるような人間だ。

そんな俺は、いつものように晩酌をして床に着こうと冷蔵庫を開けるものの、目当てのビールもとい、発泡酒が無いので近くのコンビニに買いに行くことにした。

これが運の尽き・・・というか命の尽きだった。

500円以上購入でできるようになるクジでビール（これは本物）が当たったので、終始ゴキゲンで夜の道路を愛車のママチャリを漕いでいた。

自宅のアパートとコンビニまでのルートには大きな国道があって、それを渡らなければならない。いつものように横断歩道をキコキコと渡っている時だった。

ギヤリギヤリと不快な音と共にペダルが動かなくなった。

チャリのチェーンが絡まったのだ。

「うえー直すのメンドクサー」

とそんなことも言ってもらえないので、下車しチェーンをいじる俺。さほど時間もかからずにチェーンは直った。

と、信号が点滅してたのでさっさと渡りきろうとした時だった。

横からの強烈な光に目がくらむ。そこには止まる気配が感じられないトラックが迫ってきていた。

(は?)

一瞬、思考が停止する。その間はコンマ一秒もなかったと思う。

俺の体が激痛と浮遊感を感じた。目前に迫り来るコンクリートを見つめながら、久しぶりにビールが飲めたのになあ、なんて下らないことを思った。

そして意識が刈り取られる。俺、西崎真也はこの時をもって、死んだ。

ハズだ。そう、俺は死んだはずなのだ。あんなスピードで大型トラックに突っ込まれ、宙を舞い、あまつさえコンクリに頭から落ちて

いったのだ。助かるはずがない。

なのに気づいたら意識があった。

俺の目には、どこまでも広がる青い空が映っていた。体の自由はど
うやら利かないみたいだ。仕方がないからずっと空を眺めていた。

鳥が気持ちよさそうに空を泳いでいた。排気ガスの感じられない、
爽やかな風が頬を撫でていく。

どれくらいだったろうか、まるで急に金縛りから覚めたみたいに体
が言うことを聞くようになった。ずっと地面に仰向けで寝転がって
いたから背中が痛くてしかたない。

そして俺は、4本の足で立ち上がった。

.....4本の足!?

え? 4本の足ってどういうこと? 自分で立ち上がって置いて、なぜ
4本の足で立っているのか理解できなかった。

恐る恐る、自分の前足を見してみる。艶やかな黒い毛皮に覆われてい
た。

『なんだとおおおおおお!?!?』

と叫んだつもりが、喉から発せられるのは、

「きゃーんーん!?!?」

と、犬の叫び語。

その瞬間、俺は悟った。

そう、俺は犬に転生してしまったのだ。

第一話 転生速攻あの世行きコース

一旦状況を整理しなければ。

俺はトラックに轢かれて死んだ。これは間違いない。あの痛みは本物だ。が、気づいたら犬になっていた。鏡やら何やらで確認していないから、実際は犬ではなくかもしれないが、四足の犬っぽい何かに転生してしまったのは確実だ。さっきから声に出して見ても

「わん！」

『こんにちは！』

とか、

「くう〜ん・・・」

『ごめんなさい・・・』

とかにしか発音されない。別に意図して犬語をしゃべっているわけではない。まるで、声にでる瞬間に自動翻訳されているみたいだ。

そして、俺が今立っている場所は、明らかに日本じゃない。どこまでも続いている野原と、遠くに見える山々。鬱蒼とした森も見受けられる。申し訳程度にある獣道とほとんど変わらないような道が、遠くに見える街へとつながっているみたいだ。轍や、蹄の後が見えることからおそらく馬車でも通っているのだろう。俺はその道の真中に倒れていた。道幅は2メートルぐらいはあるだろう。犬は鼻が効く代わりに目が悪いと聞いたことがあるが、俺はすこぶるよく見

える。生前・・・というか人間だった頃より遥かに良い。

明らかに日本じゃない。ひょっとしたら地球ですらないのかもしれないと思えてきた。さすがにそれは小説の読み過ぎだと思うが・・・。

と、何やら嫌な臭いがしてきた。これは・・・獣のような臭いか？ぐるりと見回してみるも、何者かの影は見当たらない。嫌な予感がしたので逃げようとした時だった。

一際臭いが強くなったと思ったら、黒い影が急に現れた。

(は?)

思考停止していると瞬間にその黒い影に囲まれた。

「グルルウウウウ」

『エサダ、エサダ』 『ハラヘッタ』 『ヨワソウ、タベル』

などと物騒な声を上げるデカイわんちゃんたちだった。5頭くらいだろうか。よくわからないが、同じ犬だからなのか相手の言うことができることが理解できる。

(やっぱり、俺は犬なんだア)

などと感慨にふけっている場合ではない。奴らは明らかに俺のことをエサだと思っている。が、逃げようにも完璧に退路を塞がれている。

「わ、わん、くうん!」

『ま、待て、話し合おうじゃありませんか!』

と意思の疎通を図ってみる。

「ガルウウ！」

『タベル！』

どうやら意思の挿通は無理みたい……。やべえ、転生して速攻あの世行きコースかも……。じりじりと包囲が狭まってくる。そして、一斉に俺へと跳びかかる！

(おいおいおい!!!まじかよ!?)

俺は恐怖のあまり固く目を閉じた。

第二話 銀髪の戦乙女

(ああ、終わった。これで俺の第二の人生も終了かあ……。短かつたなあ……。)

固く目を閉じ、来るべき衝撃に耐えようと身を硬くする。なにやら、ふわりと優しい香りがした。獣達の嫌な匂いの中、そんな香りが出てきたのが、あまりにも不思議で、目を開ける。

「ハアアツ!!!」

そこに俺は戦乙女を見た。

流れるような斬撃が恐ろしい犬たちを斬り伏せていく。突然の奇襲に犬たちはなすすべなく斬られてゆく。

美しい銀線と彼女の立ち回り。まるで剣舞を踊っているようだった。飛び散る血飛沫さえ、彼女の剣舞をより美しくするための演出みただ。

(綺麗だ……)

危機的状况にも係わらず、俺は彼女の戦いに目を奪われた。

あとという間に2頭を仕留めた彼女は、

「次は誰が相手かな？弱いものいじめする奴は容赦はしないよ」

と俺を庇うように立つ。おお、なんとという頼もしい背中!

風に吹かれ、なびく銀髪。右手には細身の剣が握られていた。防具は・・・アレは皮か何かだろうか？あまり重装備には見えない。おそらく動きやすさを重視しているのだろう。

「グルルウ」「ガウツ!!」

『チカズクナ』『ジャマスルナ!!』

そんな声が聞こえてくる。

「まだやる気?」

やれやれといった風に肩を竦める彼女。

「仕方が無いなあ。さっきは気配を消してたから奇襲に成功したものの・・・」

剣を構え直す、銀髪の戦乙女。見た感じ、俺より年齢は結構低そうだ。16ぐらいだろうか？

「さすがに3匹同時は仕留め切れないか・・・」

「グルルル」

犬たちは牙を剥き出しに唸っている。

「ならば・・・我が手に宿るは激情、火炎!」

左手を前に突きつけると、魔方陣のようなものが出てきた。

(つて、魔方陣!?)

すると、魔方陣が輝きを放ち、炎が吹き出して犬たちの足元を焼いた。

「きゃんきゃん!」

『ニゲロ!』

犬たちは炎に驚いたのか、一目散に逃げていった。

「つとに、なんで同じ犬だったのにグラドッグは餌としか考えられないんだろうね」

剣についた血糊を拭きながらこちらを振り向く。

「怖くなかったかい?大丈夫、私は敵じゃないよ」

剣を腰の鞘に収めた彼女はしゃがんで、俺と視線を合わせようとする。

瞳は赤く、銀髪と相まってとてもきれいだ。そして、すっと通った鼻に、白い肌。

「わふーん……」

『超絶美少女……』

思わず声が漏れた。

「おうおう、怖かったんだねー」

と喋って抱き上げてくれる。

(うおおおおおおお!!!)

やべえ、犬に転生して良かった！
全力で尻尾をフリフリ。

「はははっそんなに嬉しいか！」

クシャクシャに撫で回される俺。イジられるよりもイジりたい俺だが、この際そんなことはどうでもいい。

正直、抱きあげられているという事実もさることながら、命が助かったことに感激していた。彼女は俺の命の恩人だ。

「ワンコ、両親はどうした？ってそんなこと聞いても分からないか」
「ふるふる」

いないよ、という意味を込めて首を振る。あ、今胸に当たった。革鎧ごしだったけど。

「ワンコ、私の言葉わかるの？」
「わん！」
『もちろん!』

目を丸くする彼女。

「ひょっとして、高位の魔獣かなんかの子供？ここまでのはっきり私の言うこと分かるなんて・・・」
「わうん？」

『はい？』

「さすがにそういうことは分からないか」

コウイノマジユウ？ひょっとして高位の魔獣ってことか？

さすがにそれはないと思うなあ。てか、俺に親なんかいるのか？気づいたらこの姿で道端に寝ていたんだけど。ひょっとして、俺はイレギュラーな存在なのかもしれない。

体が世界に馴染めなくて消失なんて、よくある話じゃないか。ま、まあ、1時間近く（体感だけど）いるのに気分が悪くなったり、体が軽くなったり透けたりしていなから大丈夫だろう。

「私の言葉がわかるなら、一応自己紹介しておくか」

俺を地面に下ろす。そして、しゃがみんで目を見つめてくる。

「私の名前はセシリア。セシリア・クレントだよ」

「わうん！」

『いい名前です！』

しかし、この子・・・もといセシリアは人の目をちゃんと見て話す子だなあ。あ、今は人じゃなくて犬か。

しばらく俺の顔を見ていたセシリア。

（そ、そんなに見つめられると恥ずかしいじゃないか）

が、その澄んだ赤い瞳からは目を離すことが出来なかった。

「なあ、ワンコ。君は一人ぼっちなんだよね？」

「わん」
『うん』

じっと俺の目を見てくる彼女。

「なら、私と一緒に旅をしない？」

そういつて俺に手を差し伸べる。

とびっきりの笑顔も一緒に俺へ向けてくれる。

「私も独りで旅を続けるのは寂しいしね。きっと、楽しいよ！ワンコが見たことないような景色がこの世界には広がっているんだよ！
！！それを一緒に見れたらモット楽しいと思わない？」

どう？とばかりに小首を傾げるセシリア。こんな犬っころに真摯に言葉を投げかけてくるのは、俺が人語を理解できると分かっている以上この子が純粹なんだろう。

俺はこの世界では1人じゃ何も出来ない弱い存在だ。世界のことも何も知らない。それに俺自身、この世界のことをもっと知りたいと思った。一緒に旅するなど、渡りに船だろう。

まあ、単純にセシリアのことが気に入ったというものもある。可愛いし、強いし。ストライクゾーンと真ん中ではないが、ガッチリ俺の心を掴むだけの魅力はある。

そんな一抹の下心も込みで俺は、

「わふん！」

『よろしく!』

ぽふ、と差し伸ばされた手にお手をする。

こうして、1人と1匹の旅が始まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9362y/>

黒犬異世界奇譚

2011年11月29日00時53分発行